好きなものに、まっすぐ

田向 健一さん

東京都内の動物病院。ここには、犬や猫のほか小動物・鳥類・爬虫類・両生類といった「エキゾチックアニマル」が日々訪れています。

院長の田向健一さんは、高校を卒業するまで吉田地区で育ちました。当時は近所に田んぼや雑木林が数多くあり、幼少の頃は暇さえあれば生き物を探し、持ち帰って飼育していたと話します。興味は深まり、中学生の頃初めてペットとして購入したのはイグアナ。動物に魅了され、将来獣医師になると決めます。

そして2003年、都内の現在の場所で、エキゾチックアニマルも診察する動物病院を開院します。当時まだペットとして珍しかった爬虫類や両生類。一匹一匹に丁寧に向き合う治療方針は口コミで徐々に広がり、全国から飼い主がペットを連れて訪れるようになります。

生き物の命の終わりも数多く見てきた経験から「動物も、ヒトと同じように、病気になって死んでいくんです」と話す田向さん。病気の進行具合が分かりにくい動物は、診察の際、厳しい判断を迫られることもあります。その中でも獣医師としてその状態を冷静に把握し、しっかりと未来につながる研究も進めます。

あるとき診察したカエルの様子に違和感を覚えます。当時海外で問題になっていた、カエルを絶滅の危機に追いやる病気が、国内でも発見されたのです。田向さんは研究を重ね、治療法を発表。その方法は海外にも広がり、広く実施されるものとなりました。また、今年2月には研究仲間とともに、ヒキガエルの皮膚病からヒトに感染する可能性がある新種のカビを見つけ、論文発表しました。

田向さんがこの道で生きる土台となったのは、それぞれ手に職を持ち、働いていた両親の存在。2人とも田向さんの生き物への興味を見守り、獣医学の道へと大学進学を決めたときには、関東に送り出します。大工職人として仕事に打ち込んだ父親。晩年体調を崩し、病院を見舞った田向さんへの最期の言葉は「何しに来たんだ、仕事に行きなさい」。自ら決めた道での生き様を、その背中で見せてくれたと田向さんは話します。

好きなことを貫き、真摯に向き合い続ける。その姿勢が世界中の次なる小さな命を救っています。

▶台湾で行ったカメの手術の講習

cover 心地よい日差しの中、大府みどり公園のじゃぶじゃぶ池で水遊びを楽しむ家族の様子です。大きく跳ね上がった水しぶきに、太陽の光がキラキラと反射しています。夢中になって遊ぶこどもたちを見守る母の表情にも、自然と笑みがこぼれていました。

2026. 7 広報おおぶ
2026年7月1日発行 No.1264
QRコードは㈱デンソーウェーブの登録商標です。
■発行/大府市 〒474-8701 愛知県大府市中央町五丁目70 ■電話/0562(47)2111
■企画・編集/企画広報戦略課 ■メール/koho-obu@ma.medias.ne.jp ■電話/0562(45)6214 ■FAX/0562(48)4808 ■印刷/サンメッセ㈱